関ヶ原軍記 初編 九九 三十

へ遠13
2207
15

徳川十五代記　編
開明小説　鳥追於松實録　十五　大尾
近世記聞　編　明治太平記　全
春雨文庫　編　敵討　笹野權三代記　全部十五冊
近世小説　夜嵐實記　全　松村春輔著
近世　櫻田實録　全
参考肥長　鹿児嶋士傳　編
近世　小倉青木實記　全部　近日出来
書物繪入　貸本所　誠光堂　池田屋清吉謹白

池清

関ヶ原軍記初篇巻之廿九

目録

一　石田三成軍使ちを遣して伏見の籠城
并城兵渡尾清十郎返りちの事
一　伏見城再び攻落の事
并判関右衛門　粮雪松平主殿介と

門へ遠13　補2207　巻15

討死事

牛込本
池清

関ヶ原軍記初篇巻之廿九

石田三成軍使をもつて伏見の
寄手と所々の次第
并城方源尾清十郎返り忠の事

去程に伏見城の寄手攻手和議
千万法しりと云ども小西源四
の妻聟いとゞ〳〵返さて

られて敵軍城ぐちの勢ひ
強く鉄炮を打てく城辺へ
い寄せ矢ぐしてを日光既に
暮ておのびりこれまつて
徒大将城一郎きんこあ平や
きこ弟代手をて い流堀手弓衆
ぐをとやおのひりん石四三郎
八幡より使者を以くゆしし

送りりるい今日城責の仰流石
く弟西方みも参るこまる徒大将
を大軍こて実来 内蔵丞長
まづ武千騎まも見ざる程の
城ぐだりにおのまるせず
ここて四郎これ俗し何分
みも手づく仰いづ三郎出
勢いこ一方をば攻破るべ 東

まてゆとりなき時なり
鴻津鴻津等の法大將大きふ
いとう今日はいとくい中の手
に有るくこの攻口に向ひざる者
城をば攻落さざるなり偏に何
ものゆらんいかん明日は一攻
ふ所なりべきの条石田反らい
大坂に来るは秀頼公へ寄

しくはせんずるべしと返答
して使者城内へ入り義弁金
吾中納言秀秋を何卒南博城
一ぢん手攻掠くく石田へ面あて
して鼻をそぎ秀頼へ忠義
をつくべきなりと家人直金義
弟つゝ城内を使ひ入り強ふ
使者のこゝろ此如くなりと

源尾清十郎は直金左衛門と
年来の入魂なり江州永原に
隠居して松平左衛門督殿の組下之
者ひ手柄源尾が組の足軽なるべ
ふ手代者は江州の者にて
自余の人交じらず直
に拙者方より宮〻中入るべ
しとて矢文を結ひて中入る

慕情に依て城の城十方〻敵
交〻高櫓高べき事に服部
之條て明日攻寄せる時〻いつり
るべ所方の軍勢と松の丸へ引
入きらべし高櫓の好き初君
秀頼公へ忠義と成く富貴
永〻おつべきなりと
よく這りて源尾清十郎

いくれを見くだかふうこび
きおふをきりり俵て金吾秀
秋ふのうしと結羽へ右鶴庵の
時をを結羽うりさくぬぎふ小
野代義博るり孫る手返り出
の者あつくいうんで渦るべ戎
やされ者る羽 内夜 松平等
りんくうて見と知らば

一茶の内代いのちとふ知りまり梨
夜ふ鶴鴻加賀守直庵ゲ手ケ
博 雲右衛つ雲えとて寵愛乃
雪士ひり見い鶴鴻ゲ家人と
いうまいあらば浪人ゲふくこ
ふ俵つ合力ゲふく客ゲなり
ふの雲右衛つい西方代雪士
まて智俵も又勝光ふる者ふり

力量も有て太刀打長双の達
人之様に荒るる共事とせて
おろそかに解陣のせり度鳴
もて徳撃和度とあるとも
而へ乗入るるの英雄ぞ
為るかの人加度度るるの
完明写るるざるを不見
く立退るるよ鳴鳴を

武雲は大将有場げ英雄知り
く呼有り寄合時直義
場東之城呼んで中されるを
今日浦田小弱げ家の働武
尺るも知出るり又石田より中
城るい秀頼の下知とて方
鳴津と秋毛をさて中城
て参懐るれ是よ仍く時の

敵ひしめき飛脚 関度杯年
本城討ん敵おうと潔ぎ心度の
不便さ年 徳川度乃公
重なるべく女中重とも丹波田
辺に送りうけ振のもの
きむ二ごろとさきもむ振
よお見へく武つの砦とする処
るり時の敵ひしめきよ

南蛮の武器に有大ケと喪うべ
きと見年振くく何年度乃
武器を以く先祖城敵するべき
るりそのるるるる西右巻つき
貴年三十巻乃若者しが
安和ばてはあり四人乃敵の
大将をむおるるふ敵ものれ
うち上有と見て百ばくと養

しりしが果てしの密奏の
が討死しり実は日本無双の
雪士なり拾ふ者らの板又く
浪人して慶長大坂の城中
たてこもり家別して討死し
なり彼くの仕足の城中なる淀尾
清十郎が返り忠しなる支ちべ
義なる新しく今日戦ひの軍

法して鳥居内度松平忠あの
あつまり今晩敵軍陣取
て鴻津鴨津等堪辺に押法
しり何さも度しし戦ひる
度し金生代為拾りも七重張り
ちへ去年て酒宴さべし
迎実和の物語りとなるふ者長
のいくそもくらの仕足乃

城を古太閤秀吉公こゝろゝとを
して雪情しのゝめ夫を惜む
まゝ苔くあゝ[illegible]どゝ一
日光　関屋公の産有し沈
をりこのうゝ主をよく御上洛
の時は産の沈もるゝ日を
其不倶法とおもふ沈れば知り
秘敬うゝく敬免まべしとなる

これゝゝりゝとそてを
見悟敬おを極めて雑人京亟ひい
他つ美びお汨別の地下人今
其義りゝ敬ゝゝちゝじふまべ
ゝゝ[illegible]今育れゝちよ松
の鬼より南其ゝゝへい歌を思
らざれば急ぶ皆ゝと高し
ゝゝとて[illegible]ひい古ゝ使りの

ありしいぐ又き命を捨ん
とて有るも有るく今は四人の大
将ぞ清代の雪士だりうれ是
八百余人お新り結まり過ぎて
最の時るとぞ結まりける

伊予撫再び我年の事
并博国右衛門別雪松平度会を

討ち

斯く慶長八年八月朔日宮の城
より清津ぐ軍五千余騎列
和下野お先陣とし切る
清津勢鎗波の声を揚く鉄
砲数おうみく塀下に迫と
年より退手此大将松平度会

家光これを見て悔恨敵無の
振舞かなはいでくやしかりの
武雲と共に出べしとて矢倉に
もどりて待ちあるを遅しと扨
も下知なるゆえ鴻池久助 鶴屋
長三郎 平野郎助 酒井助太郎
横山惣蔵 木村先年出られず
残ひとり武右八 指金清助 横雲

のこりるに関乃て急ぎ揚く
遅手代門よりおの出て訴
下知して木戸を開き通
年及ぶ新木戸を開かしる
に行逆身入るいせぶるぞと大喜
ふ鳴りもて所郎宇理又四郎
沼下拾人斗りを沼て惟関へと
もも身入手出べ その見悟こと

別而ゞ云士の船ともお木戸口城
内へ破れんとせし松平主殿之助
是を見るく矢倉より殿で下り
陣城退矢我しく續けと下知して
木戸口ゟ武者武拾弐人宛
落していくもゝ欲しく宛
て是る相渡ゞしゆんくも皆く
陣を入くお御くく実や云亂

の実どさい天大地雲も白むとや
内りの清清野毛又大手外
木戸を退矢ゟ主殿助これを見
くきりや勝利ゝいの時を高時
鶴毛明海る比こ物りゝ出廓
を海尾清十郎助ゞ松口松の
鬼より金吾秀秋乃軍名地引
入をゝりこの世ゝ小原ゝを思

曲輪の下小屋に火を掛けり
ありて本堂より雲霞立籠
急度見えくさて
清十郎ゞ逆人源内
家人等こちとき
ちと陣ぞやへ
見ふ陣ゑ大軍
地ゝ松の丸に

地ゝのありいふ鬼神の
ちちきとしゝ
叫ひはまず歌
きざる根まやや
なくちいく
大丈夫ゝ二
大美ちと厨
帰を尚させん

本堂へ入り
大吉ゝ
本博御殿の
歌無主の弱
むゝより

敵の国をと結ぶく自害と急ぐ
る本をとくばに敵を奪って
討死をべきるりまん三百ケ原
の戦ひを面とく年既
く六十二才のつぐ和の徳の
働くをへるるばくも秋く続け
や者共と本陣を打下して
敵を押向る金の葛籠の建

物を敵ロく鎌倉軍兵百騎斗
城先年兵く鎌倉勢の
る搦手城下るさへ豪勢
て大喜ん年望来三の出陣
する者居居右衛門尉元忠
と身毛のるを頭らせる市し
見へられ重度仰入墨の体
次郎つ本もいろ初せんと

打出ようとせしの大軍押寄
するに関の声を合せること数く
と捨て入ぬれば天晴度重き
働らきなり打合もつる程に旭
の輝き籠る東西に麗きて
勝しの元を様なる戦死と思ひ
極めて車なれば一ト見こしも
ありぞくこそろうきるうて

この七月の浪岡合戦小泊堀田
等の大軍を退
大浦石川遠藤
弘前秋田
加しも切所を去らんば打戦
ようと仮くに人の大将に所よ
立切て去て士卒お討死せるも
あり主従釈子も舟へ乗して

次第〳〵に軍勢討ち
かれて敗らいけるに松平主殿
助を庭先の荒馬平のりて
遍立出てしらせ申人
もなく天晴の武者ぶりなり
爰に鍋弾のより槍を取
直さんと出る大母衣をうけて
七寸の馬平寄きすぎりきみ

出る形勢に小山の動くが如
く也松平主殿助家忠
父を大将分として武勇抜群
なりしが討死せり此主
殿助家忠を見つを目がけく
るを踊せ引下げさせ
むと槍直さんを見て
天晴大将なれと三号柄の槍

遊客のべかりしきくに品ひ
う先方方の客とのべく寄出
さそ年いうでう潟べさ大力の
人大角れ檢風年爲きて松
年家方ゞ掏されう腰ノ不
きうく餘先ノ白く寄つぬき
者れバるうり志逆さ女年前
角り国方重つさ寄つけ結を

掾とうるし振と所重度物ゞ
家人西四外記　酒井物吉郎
女人を重人の仇と打くうり
しゞ終ましうれうさてきる
鴻津家ノ先手刑和手拭るも
つうく鍛うつくそを切うり
掾を用度浮決方集つき子変
百化手おさうひしゞ手頁

しゆく之地ゟ相ぐして
博多へ入り日宝寺ありさて
そこ退ていまゝ鴻津鵜
鴻ゞ去軍勢大船入しゟ見
もつて尾ゝ年源尾ゞ逆ん返り出
もつて敵城門へ入もつゝ敵の
ざつゝ又るゝ合ゆつくせもる
もゝ又七日いつゝ尾ゞゟふ見形。

もるゝ記ゟ大之

池清

実ケ原軍記初篇巻の廿九終

池清

池清

関ヶ原軍記初篇巻之三拾

目録

一 鳥居元忠籠城の事
并松平丈右衛門
討死の事
一 恵之 鳥居 上林城討死事
并伏見城の事

池清

関ケ原軍記初篇巻之二拾

当春元忠の雪戦の事

并博多の

事

曰く当春元忠右馬の元忠討死

て俄に蒙り及び申し訴

まつる初篇年二編の初度より

ていこの四三歳依足へ来る義浅度
三歳ゞ功を責して此度の棟梁
為べしその間三城攻て中
されこり後くに三策こゝろ大ひ
ふ奏りて安部をれ金吾
中納言秀秋これをいそどり
く宗東へ問て後手裏切り
と称する新く後詰合合し

軍評定手配り小西筋を大谷
刑部少輔吉隆地を大将として
三城を攻別出張を定軍
廣太之先を南付
徳川殿の四足騎丹後の国田辺
ありこれを攻敗をべしそして
会津へ発して浅野少輔を大坂
入城を

秀頼の御子滅亡有しい
編り御堂淀殿の御最
りて第りの中さて出の
坂滅亡より及ぶれより此節
さや内こともりく下知
有りしこ加り廣大の
茶人も出来り色金く
淀どの若人の科なり

お浦より牝鶏の晨をなす
家亡ぶるという実も理り
あり尤も雄人も知る
浦こうれいめんどり時を作
るもいつ千いあらば男女の
表方へ出るくもる変をいう
なり恠異家亡も余り
不女の才知智るるは何ぞど

さるべりてもこの
出さるべき其家必ず裏微
を又吏と尾平数中に
拙き車拙き家まい作る
ありめんく新のごく
勉てもとゝ思ひちがひ
も子供の釈ちいひ又商売
代身ゝ拙き失あり世人

代外国も行きそこの内
年合点して拙き車如
ばかりまいくにはいるる
車い結きそこるるを
大きな手お遠ちりこく
如の我判をとる車あり
きこの所を下より拙くと
中ゝるとき人のこゝ

先一年ばかり凡そ政事を
天下を治むる事いとなく
内緒を慎まるる女の
さまおびただしい間えんよ
りて滅亡したる事い
後度も限りなく古来より
その例しなきまるり
南村をくい百年以来智恵

者は参れる紀松平伊豆守
信綱城酒井雅楽頭参られ
たる碁子和あり龍蟠虎踞
人物たる人是全く利
口たる物にして仁徳の名誉ふ
不能徳を上下共不忍
下智者之ゆえ元亨釋書
事は法中職を

仰付られ候

御前へ

初めて中上られ候大役

城

仰付られ候

即時

御使を仕り

大職の儀

御次まで

御老中まで中上候

そして御次の方へ退出して

酒井濃守殿に向られ

天下大事

御老中職

仰付られ候

上意

むり実如

意趣を

存知

奉りいらつ

候

城中上べく

心底の

奉帰

仕り

書

るべ

家人

お預

仕り上

御刀

登

博仕るべき奉公時伺仕合せ
下さるべし　中さるる間よ
出雲井殿へ参り　いたれ果
参る　初恵　發明の吹へある
吏　今伺出雲井殿職
作有らるるるる書家
家来共　お使して伺請
中上べき　お使とも大ひ加ふる

けるりとて　知るね人も色
新家作　長き下箱あるく
内室　向るれ今日
上意　おのむきをもて
変らるるく　お使下及び参
伺吏を　中さん中と有るば
内室　れの屋物及　坊時い大ひふ
おぐるる　中されるもの

陣屋に郎党ともなる侍
ゆかりいるちなれば御文
を成一通いざるやその上
女子ゆかりの侍をもるじを
ゆくとやされる時平
給ふるいくく家も清らけ
中上くいひしらぬども
て下れ老職と称る侍方

より給ひ御ひい仕置あ者
事をうかがひ内えん城
ゆくして来るちり生
時事ありて　公儀の支
ゆえ一切是あるべき家あげ
内孫の支流をば断くいる
さる事ゆく相てい御侍を
中上屋敷をるりとその尋

内室へ行ふ
公迎のため行ちんどう
元合中べきやあるて侍所
代へのため百姓搗し
中ろ米ろの為乗り拵ら
ば侍元中へべしと袴の
紐をもねりて出ちんるよ
で内室を出者て出袴の紐

もねりうとやさしく
時く仕度者て来事之
教ふ乃為代へいるる
ため有ども搗ばらば
と為来て表のうへいで
らん家老用人を和徒役
人出城ばいでして
内儀の元次いろ所ろ米く

和極めて少き　様これあり
先例の　人々に親疎を
如度度并びお家人云々で
年中勝手に為仕り
政務おこなひ閑職の事項
嫡孫おうけ中さるべきこと
疎略なる無之今御請中
上申さるべきこと

御老中とも
ありて大ひに感心なり
天晴の仰意なること古今政事
れそどりの編年
内閣の事項
編纂なる近代の賢良に任也
学識人いろいろこれを参
より叡慮なれば仰意なるべの

中さんるい先年前の事
い郎のごとく凡そ天下共
事内緒に依て諸事を
交さば立どころ事郎西の
種々これ変一を南河書の
為い安双の出西郎しく
伊郎ひの事あるひ品位
ものど老中方へ内儀のよ

此後を日来不西年出老出
事事変隠ひ内立城以く中
郎ら毛ら一い西恵之後ると
浪度を秀郎名品幼年に対
徒事と下知有ハ俗へふ
滅亡ひ相ものとちり
去程事依兄の槇れ退事先ち
寄年至度を今討免してより

仍援を士卒おそれてとくとく
討死候　作れる人陣ぐ云も
なき事へ鴻津を庵原弥兵衛
鴻加賀守直義おの毒物入れ
く籠城立つる又城内に物大将鳥
居彦右衛門尉元忠を差く討死
城きつかれ松平久左衛門近
正平援陣と打せく結合を

野久左衛門人へ鴻津加賀守陣
城たり平うけ浦岡中務書秀家
の使へ平西も振ぐ打入て鴻
を合七城ぐの英を魁の援を
傾手馬を平一両平押立兵糧
平使へく前援左右に松南り
鳥居元忠を立んで
秋行打く破れを馬れ平

弟上橋をのりて鞍壺にすがり
城結弁三尺あまりの太刀を高甲
にあきらかにて向の敵城中
破りしに為元が家臣の
きたりて目をおどろかす虎乱
能登守切捨切捨切
右の家人の内つねあり人を
無双の剛士にて年を六十なる

余りなれども度重なる戦
大勢の敵を討たり打洩
若者共も皆屈強のものなれ
ども必死にて如く相働く
又上林竹庵大和守義の例を離
れず百余人の者共
結所に切立大和守義の側
放されて討死又も命

叫びて倒るるもの多し中にも
大和元忠は四方へ弦掛ケ足てるに
引づられ身体の者共は皆掛強
あり此家名高いる者〳〵掛井
よりて生害せんべしと思ふに
引入るに掛手代木戸口より入る
長兵衛の厨元忠
左兵衛 上林作兵衛本掛殿にて

引退ぞく博中の時の鞭ひ
手負しるもん〳〵竜武者
なんど立並んで掛手代つ
押寄き待掛へとりしを
四人十騎の者共の引
元入り大和元忠長上
林を目指し兵人木戸口へ立
入りしに鴨和賀ちゃ

陣中より指図を請て走り
り物語を会せしく大将と見てけ
きび一文字より進み来る形勢を
俯て小山乃ごとくこと
ろうに相手大事つ近正ち
此時年廿十二才なれども武功武勇
の達人なりえり
東照宮御秘蔵の人なりしく

大功を成りて四大事此時いつ
ちも御所東手兵庫れうと
叔を正毛今い家康を急ぎい
ち勢より此戦ひ手るい覚を
あ見城打くに伏を保く近正い
るを奈放して結引さげまち
ゑへみりるの長安寺つ
も馬を彼不手奈放して走り

をりふし大雪つゞき燒ありてつぺん
く寒さる松平近江も寒氣の
雪士といへた大力く寒迫きく
屋敷にぞくぞくと倒き伏るふ
雪大雪つゞきそ凡知り来と掘て
却や関ん雪つゞき度ゞ武雪を
以く逆鉾にて却かし何とて
冥土へゝ来きざるをゝゝ

実和の和を軍て関東へ来
きまやゝとの一ゝとのゝて
元ゝゝゝ全ゝゝ来ゝ地
ゝゝゝあゝゝ関東ゝゝを
志実に心底ゝゝゝゝゝゝ
人生之ゝゝゝゝゝ目を掘ゝ矢
掘る以より食ゝ中納言秀秋
の家人四辺雪大雪つ　日夜美

門内人数多来り大音を以
ゞ高々と名乗て揚てけり
揚屋之 番所 上林地討死
同 依足前体の事
初番揚屋番つ屋之者聞
揚手代木戸口へ番人進足れば

拵形の上り角平番所番所
つ所元来狭き縦長屋と入組て
居りしの節国元番つ大音
揚番所見知りの者に元忠急度
退のれと呼ぶ足く我名を名乗
三遠友列の我と時
を海ち如来武者い仕手切り

よりて今年六十二才なり
とい〳〵老陰と丈夫なりかし
あり不自由之色い先年三方ケ
原の合戦手負したる右之と
いひなぐ〳〵検死合せをなす由之
を三男柄の弾を持く実合
ゲ密右情つ上陰く放ゑ弓矢
ゲ弾を打高しとえたも

多双の雷士なりといへ共六十
二才老武者也其上食物より
の働き常よりは弾手
左り此見を見の作まなる也
仍く濡の不を固右情つい三天
文才の方を接ぎて敵人
兵つ為の手切手りえたい
ゆるりと押宛実検をなく

構へとして芸佛胴のたわ
れ強ひ拵こと烏兵衛も
大力なれ芸腕前なる故也
のみ也拵さたり兵衛て
兵衛が狗先へ突めぐり三十軍
れ若者大雷猛の拵ま突拵て
怨まちに討死仕り兵衛
と兵衛が武雷と感じく城

首と乗本くさくさんも拵念
あり家人の内まて陽せらし
と芸徳く拵兵衛の内く
情け有てのみ拵ふ兵衛
が実報を見くく上林竹庵小芸
のく孫く力わ不足こそいく芸
志わおしく光常くぐきり
来りて直之へる妻手と組身遣

漸く腰丈ケ有て疲るる法師
あり是右衛門と六尺有余の
大男なれば少しも動うごき上林
も四天八てと御くくりつけ
編へ牛の角を縛りさ所如
くこの国右衛門急度足くゆせ
情るの志い縛れり伝く
海ぢが実報こ自体也べ

きことたりれ手を差うんで
縛の毒ひを抜き所手を門
抜目よりるく差上く抜で
お敷る三尺五寸の古刀を抜て
力く任せて切られば肩先より
切放して腰より上を手に残
もり遠ぞれ和田の彊幅也
扱上林ぐそい鈴木四郎之情と

いつの討死しけり且又高屋が
首をば家人隠せしをいへ共
親軍は内なれば隠し難し
て鴻津が家人別而下野が手
ふ入けり彼鴻津鴻の
女房に隠くと押入く城中に
対面を悉く討死しこの城
を焼の三百余級あり手負

しける者共或百余人の内軍兵又
百余人大将に対面を以て討死を以て
寿永元年八月朔日之今に城中
に隠く兵一人も残らず既に
落城及びけり依て法勝
寺を揚く伏見の城に屯
する討死をなすべき実検
して大坂に注進を大将達の

首四級上林が子の勢
り先き追討の手始めよ
逆大坂京橋に貫に拵並べ
此京町人佐理屋左衛門と
いう者有しが日比元亨の咄
おもしろく仍て彼者を座ゲ
論に有り智恩院と長源
院と号せ　内府公

寺屋敷大ひ手ふ使
出り百姓を呼ばゝと御百
姓之此菩提所い奥州柳橋と
いう所に寺屋敷今に残り
寺屋百石屋敷場に成る内府
屋敷の事　松平豊後同く又
左衛門　本皆く設武を一倍の法
和尚之又上林行房の家筋を

今日繁業なるに付時の働き
北海之幸

池清

冥ケ原軍記初篇巻の三拾 大尾

池清

魏譯倭軍書	繪本	曲亭馬琴之作 其外諸先生作
唐書	書本	軍書 敵討 諸家騒動 御捌物
隨筆	滑稽物	
國々名所		
近世戰爭書類		

右之外數品古庵所藏之写本謹奉獻之也

東京牛込細工町

誠堂 池田蔵書